

〔個別研究〕

## 親と子の生活に関する調査（第3報）

— 父親の就労時間と子育てへの影響について —

母子保健研究部 齋藤幸子  
共同研究者 高野 陽 (母子保健研究部)  
高橋種昭 (客員研究員)  
窪 龍子 (和泉短期大学)  
井狩芳子 (和泉短期大学)

### 要約

3～6歳の保育園児の父親420人を対象に、父親の生活時間について「就業時間に関する条件」および「子ども観・子育て観」とのクロス集計を行い、それぞれの関連を検討した。

仕事の始業時刻と終業時刻が「毎日大体同じ」群の父親は、「日によって異なる」群に比べて、平日・休日の子どもと一緒に過ごす時間・休日と一緒に遊ぶ時間が長かった。「始業時刻と終業時刻を自分できめたり変更したりできる」群の父親は「多少変更できる」群と「変更できない」群に比べて、休日に子どもと一緒に遊ぶ時間が短かった。父親の「就業時間に関する条件」は平日のみならず休日の子どもと過ごす時間にも関連しており、就業時間の一定している父親は子どもと遊ぶ時間が長かった。

休日に子どもと一緒に遊ぶ時間と父親のもつ子ども観・子育て観のクロス集計した結果、「子どもの存在」「父としての実感」といったどちらかという漠然とした概念を尋ねた項目とは関連が見られず、「遊ぶことの意味」や「子育てとは」といった具体的な行動と直結した設問に関連が認められた。休日に子どもと一緒に遊ぶ時間が長い父親は、「父親に心の安らぎをもたらす」「楽しみ・喜び」「生活の潤い」「自分が成長できる」と感じている割合が高かった。

見出し語：父親、育児、就業時間、子ども観、子育て観、

A Study on the Relationships between Parents and Children in Family Life(3rd Report)  
: The Fathers' Working Hours and its Influence on Child Rearing

Sachiko SAITO, Akira TAKANO, Taneaki TAKAHASHI, Ryuko KUBO, Yoshiko IKARI

This study explores the relation between fathers' working hours and its influence on their parental time, concerning the length and quality of time fathers spend with children and their views on child rearing. By analyzing questionnaires from a sample of 420 fathers whose children were aged 3 to 6 years and attending day-nurseries, the authors found that the fathers who worked in regular hours everyday spent more time, including playing, with their children than those who worked in irregular hours, both on holidays and weekdays. On the other hand, the fathers who worked in flexible working hours spent less time with their children. The results of cross-analysis also shows that there is a relation between the length of time fathers play with children and their views on child rearing such as "a meaning of playing for children" or "how parenting should be", which reflects their actual experiences. Additionally, it was found that playing with children gave fathers feelings of peace, pleasure, joy, comfort, and maturity of themselves.

Key Words: Father, Working hours, View on child, View on child rearing

## Ⅰ はじめに

第1報<sup>1)</sup>・第2報<sup>2)</sup>において保育園児および幼稚園児のいる家庭の親子の生活実態について報告した。親が子どもと一緒に行動の内容・一緒に遊ぶ時間量などを調べた結果、保育園児家庭と幼稚園児家庭の間ではその差は小さく、父親群と母親群の差がより顕著であることが分かった。すなわち、保育園児家庭でも、幼稚園児家庭でも、母親が子どもの生活全般を担っているのに対し、父親の子どもの関りは一緒に遊ぶことが中心であった。本稿では父親の生活時間について分析をすすめ、子どもと一緒に遊ぶことが父親にとってどのような意味をもつかを検討した。少子対策のポスターにもうたわれている「父親の育児」推進の可能性について考える資としたい。

## Ⅱ 研究方法

集計対象は3～6歳の保育園児の父親420人とした。調査場所は東京都および神奈川県であった。調査内容など詳細は第1報<sup>1)</sup>に示した通りである。父親の生活時間について、「就業時間に関する条件」および「子ども観・子育て観」とのクロス集計を行い、それぞれの関連を検討した。

## Ⅲ 結果および考察

### 1. 父親の就業条件と子どもと一緒に過ごす時間

「父親の就業」と「子どもと一緒に過ごす時間」の関連をみるため、就業条件別に父親の生活時間の平均値を比較・検討した。就業に関する条件としては「始業時刻と終業時刻が一定しているか否か」と「始業時刻と終業時刻を自分できめたり変更したりできるか」の設問項目とした。なお、生活時間の父親全体(420人)の平均値は以下の通りであった。

[平日の平均値]

子どもと一緒に過ごす時間 : 2時間32分  
 子どもと一緒に遊ぶ時間 : 49分  
 自由時間 : 1時間52分

[休日の平均値]

子どもと一緒に過ごす時間 : 9時間25分  
 子どもと一緒に遊ぶ時間 : 3時間43分  
 自由時間平均値 : 4時間46分

#### (1) 仕事の始業・終業時刻と生活時間

「仕事の始業時刻と終業時刻(残業も含む)は一定していますか」の設問に対して、「毎日大体同じ」が157人(37.4%)、「日によって多少異なる」175人(41.7%)、「日によってかなり異なる」86人(20.5%)、無回答2(0.5%)であった。表1に「子どもと

一緒に過ごす時間」「子どもと一緒に遊ぶ時間」「父自身の自由時間」の平日・休日それぞれの平均値について、「毎日大体同じ」群を基準として、他の2群と比較した結果を示した。

「平日に子どもと一緒に過ごす時間」は始業・就業時刻が「毎日大体同じ」群が2時間43分と、「日によってかなり異なる」群の2時間13分に比べ長いが、「子どもと一緒に遊ぶ時間」では前者が52分、後者が47分と差がなかった。自由時間も前者が1時間56分、後者が1時間49分で差はなかった。

「休日に子どもと一緒に過ごす時間」は始業・就業時刻が「毎日大体同じ」群が9時間57分と、「日によってかなり異なる」群の8時間45分に比べ長く、「一緒に遊ぶ時間」も「毎日大体同じ」群は4時間11分と「日によって多少異なる」群の3時間18分に比べ長かった。

このように休日に父と子で過ごす時間は、始業・就業時刻が「毎日大体同じ」群が、始業・就業時刻が「異なる」2つの群に比べて、長い傾向が認められた。一方、休日の自由時間は、始業・就業時刻が「日によって多少異なる」群が5時間18分と、「毎日大体同じ」群の4時間23分に比べ長かった。

父親群別に検討すると、次の通りである。始業・就業時刻が「毎日大体同じ」群の父親は平日の子どもと過ごす時間・休日の子どもの遊ぶ時間が他群に比べて長い。平日の安定した生活時間が子どものために時間を使う体力的・精神的な余裕をもたらし、休日にもその影響が現れているものと考えられる。

始業・就業時刻が「日によって多少異なる」群の父は、平日・休日ともに子どもと過ごす時間が全体の平均値に近いが、休日では子どもと一緒に遊ぶ時間が他群に比べ短く、自由時間が長い。時間の使い方に、父自身の自由裁量範囲がやや広い可能性が考えられる。

表1 仕事の始業・終業時刻と父親の生活時間平均値(時間:分)

		大体同じ (157人)	日によって 多少異なる (175人)	日によって かなり異なる (86人)
平日	子どもと一緒に 過ごす時間	2:43	2:32	2:13*
	子どもと一緒に 遊ぶ時間	0:52	0:46	0:47
	自由時間	1:56	1:51	1:49
休日	子どもと一緒に 過ごす時間	9:57	9:18	8:45*
	子どもと一緒に 遊ぶ時間	4:11	3:18**	3:46
	自由時間	4:23	5:18*	4:25

\*p<0.05 \*\*p<0.01

始業・就業時刻が「日によってかなり異なる」群の父親は、子どもと過ごす時間が平日のみならず、休日も短く、休日の自由時間も短い傾向が認められた。平日の勤務時間が不規則であることが休日にも影響を及ぼし、生活全体に時間的ゆとりのなさをもたらしているものと考えられる。

以上の結果から、父親の就業時間が規則的であるか否かは、平日の生活のみならず休日の生活にも影響があることが示唆された。父親の生活時間から子どもとの触れ合いの時間を確保するためには、就業時間が「毎日大体同じ」という安定した生活時間が背景として望ましいといえよう。

### (2) フレキシブルな就業時間と生活時間

「始業時刻と終業時刻は自分で決めたり、変更したりできますか」の設問に対して、「自由にできる」38人(9.0%)、「多少できる」198人(47.2%)、「できない」179人(42.6%)、無回答5人(1.2%)であった。表2には父親の生活時間について、始業時刻と終業時刻の変更を「自由にできる」群を基準として、他の2つの群と比較した結果を示した。

平日の生活時間では顕著な差は認められなかったが、「自由に変更できる」群と「多少変更できる」群を比較すると、「子どもと一緒に過ごす時間」は前者が3時間と後者の2時間28分よりやや長く、「自由時間」は前者が2時間16分後者の1時間48分に比べてやや長い傾向を読み取ることができる。「自由に変更できる」群は平日の生活時間にややゆとりが感じられる。

一緒に遊ぶ時間では平日は3群ともおよそ50分で差がなかったが、休日では「自由に変更できる」群が2時間57分、「多少変更できる」群が4時間2分、「変更できない」群が3時間35分と「自由に変更できる」群が最も短かった。始業・終業時刻を自由に變更できることが、休日の子どもと遊ぶ時間を増やす条件とはいえない結果であった。フレキシブルな勤務時間体制はパートナーや子どもの病気など家庭生活の非常事態に役立つが、日常的に父親の勤務時間が一定していないということであれば、子どもの生活リズムには適合しにくいことも考えられる。

以上の結果から、父親の生活リズムの子どもへの影響が示唆された。母親は子どもの出生と同時に授乳などのために自らの生活リズムを子どもに合さざるを得ないが、それに比して父親は生活リズムの変更を余儀無くされる度合いは低い。また、父親自身も生活リズムを変えたくないと思っており、実際に仕事の時間は変わらない人が多いとの報告<sup>3) 4)</sup>もある。しかし、子どもという新メンバーが家族に加わり、新しい家庭生活を営むにあたっては、夫婦の協力が不可欠である。具体的な家庭支援としては、父子関係と子どもの心の健康との関連を視野に入れ、父親の生活リズムについてある程度の助言・指導も必要であろう。

表2 始業時刻と就業時刻の変更と父親の生活時間 (時間：分)

		自由にできる (38人)	多少できる (198人)	できない (179人)
平日	子どもと一緒に過ごす時間	3:00	2:28	2:33
	子どもと一緒に遊ぶ時間	0:49	0:50	0:48
	父の自由時間	2:16	1:48	1:52
休日	子どもと一緒に過ごす時間	9:41	9:44	9:04
	子どもと一緒に遊ぶ時間	2:57	4:02**	3:35
	父の自由時間	5:06	4:49	4:38

\*\*p<0.01

## 2 父親の「子ども観・子育て観」と子どもと一緒に遊ぶ時間

前項に見るように、平日に父親が子どもと遊ぶ時間は就業の条件に関わらずいずれの群でも約50分であり、一方休日では条件別に差が認められた。父親の「子ども観・子育て観」に関する4つ設問(子どもと遊ぶことの意味・子育てとは・子どもの存在とは・父としての実感をもつ時)を父の生活時間別に検討した結果、前項と同様に休日の「子どもと一緒に遊ぶ時間」に最も顕著な差が認められたので報告する。

休日に父親が「子どもと一緒に遊ぶ時間」の全体の平均値は3時間43分であった。ここでは「平均値未満の群」と「平均値以上の群」で比較を行った。以下、平均値未満(231人)を「L群」、平均値以上(170人)を「H群」と表す。4つの設問は重複回答可とした。

### (1) 父にとっての子どもと遊ぶことの意味

「あなたは父と子の遊びはどのような意味をもっているとお考えですか」の設問では、表3に示すように、「H群」はすべての項目で選択率が「L群」を上回っており、中でも、「子どもに人間としての成長をもたらす」「母親の育児負担を軽減する」「父親に心の安らぎをもたらす」「文化を伝える」を選択した率が「L群」より、顕著に高かった。この4項目について、図1には子どもと一緒に遊ぶ時間が2時間未満から、1時間刻みで6群に分け選択率を示した。各群の人数は2時間未満75人、2時間~74人、3時間~82人、4時間~50人、5時間~49人、6時間以上71人である。「H群」の中でも、子どもと一緒に遊ぶ時間が長い程、これらの4項目の選択率が高くなっていった。

この4項目には父親の子育てによって得られる3つ

の要素が象徴されている。すなわち、「子どもに人間としての成長をもたらす」という子どもへの影響、「母親の育児負担を軽減する」というパートナーへの影響、そして「父親に心の安らぎをもたらす」という父親自身への影響である。子どもと遊ぶ時間を長くもつ父親は、「子どもが喜ぶ」「父子の関係を強める」といった多くの父親が認識する基本的な意味づけに加えて、子どもと遊ぶことの意味をより広く見い出していた。

(2) 父にとって「子育て」とは

「あなたにとって子どもを育てること（世話をしたり、一緒に過ごすこと）とはなんですか」の設問では、表4に示すように、「H群」は1項目を除いてのすべての項目で選択率が「L群」を上回っていた。顕著な差が見られたのは、子どもを育てること（世話をしたり、一緒に過ごすこと）を積極的・肯定的に捕らえた「楽しみ・喜び」「生活の潤い」「自分が成長できる」の3項目であった。この3項目について図2に、子どもと一緒に遊ぶ時間の量により6群に分け選択率を示した。子どもと一緒に遊ぶ時間が長い程、これらの3項目の選択率が高くなっていった。子どもと遊ぶ時間が長い父親ほど、父親自身にとっての利益であるところの「喜び・楽しみ」や「生活の潤い」を見い出し、「自分が成長できる」と感じていた。

(3) 父にとって「子どもの存在」とは

「あなたにとってお子さんとはどのような存在ですか」の設問では表5に示すように、選択率で「H群」の「L群」を上回っている項目がほとんどであるが、顕著な差は認められなかった。

(4) 父としての実感

「現在どのような時に父としての実感を感じますか」の設問では、表6に示すように、選択率で「H群」の「L群」を上回っている項目がほとんどであるが、顕著な差は認められなかった。

表4 父にとって「子育て」とは (%)

	L群	H群	検定
親としての義務	76.6	82.4	
楽しみ・喜び	61.5	74.7	**
生きがい・張り合い	56.7	64.7	
生活の潤い	29.9	43.5	**
単なる日常生活の一部（普通のこと）	21.6	17.1	
自分が成長できる	18.2	30.6	**
気分転換	16.5	20.0	
苦勞・負担	6.9	8.2	

\*\*p<0.01

表5 父にとって「子どもの存在」とは (%)

	L群	H群
自分の分身	84.4	88.2
かけがえのない大切な存在	73.6	79.4
家族の結び付きを強める	52.8	61.2
精神的支え、慰め	33.8	38.8
次の世代をつくる	27.3	27.6
自分の生命を伝える	22.5	17.6
社会人として子どもを持つのは当たり前	8.2	8.2
家の存続のため必要	6.9	8.8
老後の支え	3.0	3.5
生活の苦勞の種	1.3	2.4
精神的負担	1.3	1.8

表3 父にとって子どもとの「遊びの意味」 (%)

	L群	H群	検定
子どもが喜ぶ	70.1	71.2	
父子の関係を強める	68.4	75.3	
家族全体の関係をよくする	62.3	72.9	*
子どもに人間としての成長をもたらす	49.4	71.2	**
母親の育児負担を軽減する	45.5	59.4	**
父親に心の安らぎをもたらす	38.5	56.5	**
文化を伝える	10.8	21.8	**

\*p<0.05 \*\*p<0.01

表6 父としての実感をもつ時 (%)

	L群	H群
子どもと接している時	75.8	82.4
子どもの将来を考える時	33.8	35.3
「○○ちゃんのお父さん」と呼ばれた時	19.5	22.4
仕事をしている時	13.9	15.9
家計を考える時	8.7	14.1
家事をしている時	3.0	2.9

図1 子どもと一緒に遊ぶ時間（休日）別「父と子で遊ぶことの意味」選択率  
（複数回答％・父親420人）

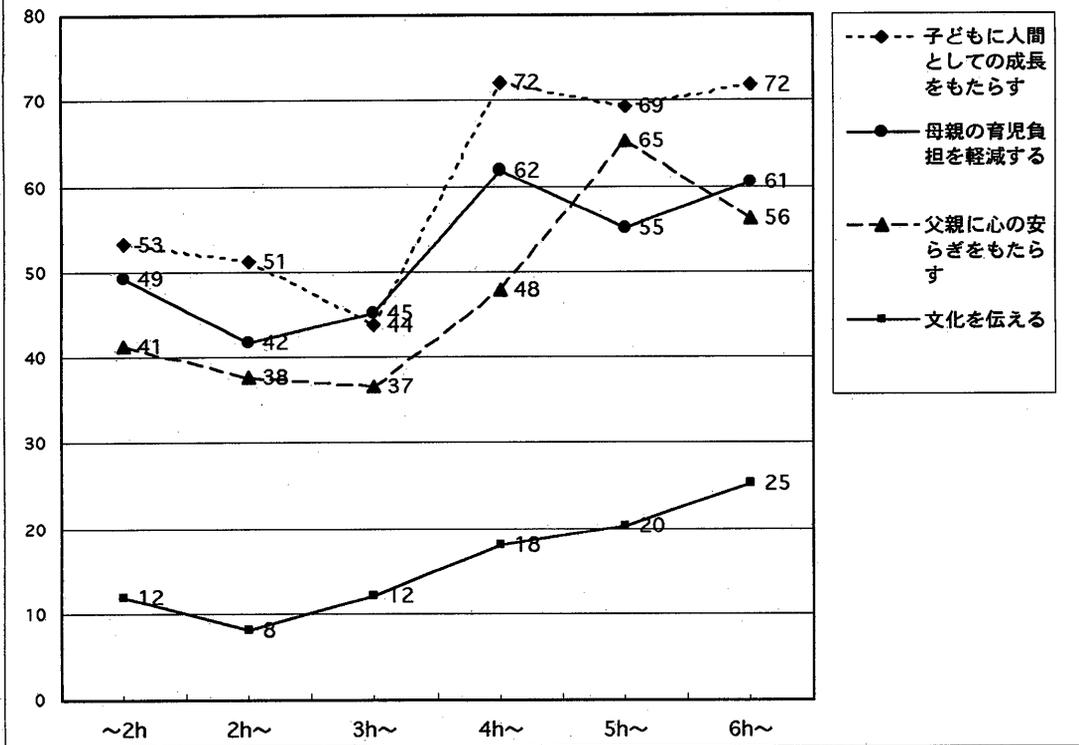
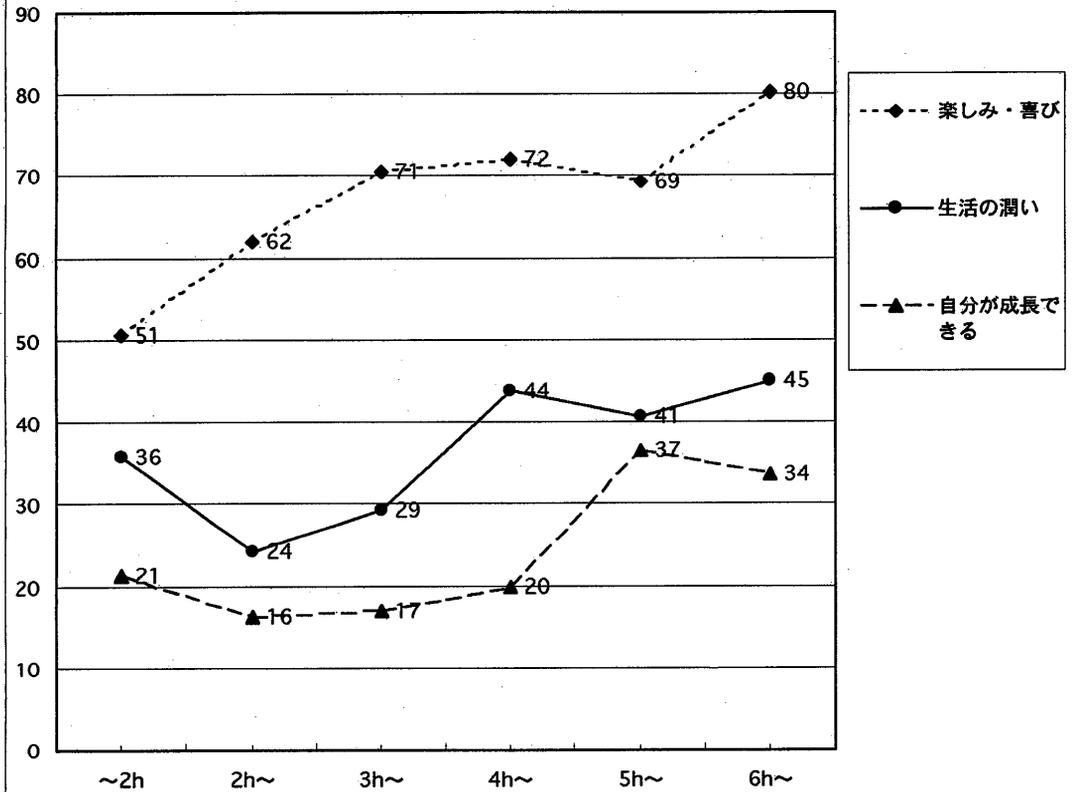


図2 子どもと一緒に遊ぶ時間（休日）別「子育て観（子どもを世話したり、一緒に過ごす事の意味）」（複数回答％・父親420人）



子どもと一緒に遊ぶ時間量と父親のもつ子ども観・子育て観のクロス集計した結果、「子どもの存在」「父としての実感」といったどちらかという漠然とした概念を尋ねた項目とは関連が見られず、「遊ぶことの意味」や「子育てとは」といった具体的行動とむすびついた設問に関連が認められた。前者を育児観、後者を育児感と表すのが適切であるともいえよう。表5にあげた子どもの存在に関する価値観とは別に、実際に子どもと一緒に過ごし、世話をし、遊ぶ行動を通じて得られる子育て感に「遊ぶことの意味」や「世話をすることの意味」といった子育ての行為自体の価値が見出される。その価値をより多く実感しているのは、子どもと遊ぶ時間が相対的に長い父親であった。

#### IV 結 語

父親の生活時間に関して「就労時間に関する条件」と「子ども観・子育て観」との関連を調べた結果、就労条件は平日のみならず、休日においても父が子どもと遊ぶ時間に関連しており、就業時間が規則的で、生活リズムの安定した生活が子どもと過ごす時間のゆとりをもたらすことが示唆された。

子ども観・子育て観では、子どもと遊ぶ時間が長い父親ほど、子どもと遊ぶことの意味や子育ての意味を多面に渡って見出しており、その内容は子ども・パートナー・父自身それぞれへの影響として認識されていた。

現在、父親の育児の推進には、母親の負担を減らすという目的が前面に出ている感がある。育児負担が母親側に片寄っていることが少子化の一因とされていることが理由であろうが、もちろんそれだけではなく、子どもに関する様々な問題が養育のあり方を考え直さざるを得ない状況にあることは衆知の通りである。

父親が育児をするということは、本調査結果で父親自身が答えているように、子どもと遊ぶことで父子関係が強められること、すなわち父子の関係を築くことが第一義である。次いで、家族全体の関係をよくする・母親の育児負担を軽減するなどのメリットを父親は認識していた。注目すべきは、子どもと一緒に遊ぶ時間の長い父親は「自分が成長できる」「父親に心の安らぎをもたらす」とした割合が多いことである。

父親の子育てに関する研究は、子どもやパートナーへの影響を論じる段階から、父親の人格発達からみた父親個人への子育ての影響という視点で考える段階となっている<sup>5)</sup>。本稿では父親の感じている「子育ての意味」を「子どもへの影響」「パートナーへの影響」

「父親自身への影響」として整理したが、それぞれの影響を「利益」と言い換えてもよいのではないだろうか。

20代30代の男女に対して行った、少子化に関連した意識調査<sup>6)</sup>において、大多数の人が子どもが欲しいと答え、子どもの存在価値について認めていた。しかし、実際に自分の手で子育てを行うかどうかになると、犠牲感や男女の役割分担観が頭をもたげ、出産を躊躇する人がいることが伺えた。結婚や育児は自由が制限され損失利益が大きいと捉えられていた。

これに対応し、子育てが親に与える利益を明らかにすることは、少子時代の育児を考える上で有用であると言えよう。本稿ではその利益(価値・意味)を実感することは、子どもと一緒に遊ぶ時間が多いことと関連していることを示した。

父親の育児を推進するための第1歩として、父親が子どもと遊ぶ時間を確保するために、生活時間の改善・工夫について支援することが有効であると言えよう。そこから、父子関係確立による子どもの心身の健康・母親の育児負担の軽減による母親の心身の健康・父親の親としての意識の発達および人としての成長といった家族全体の健全な発達へと繋がるであろう。

#### 文 献

- 1) 齋藤幸子、他：親と子の生活に関する調査(第1報) 保育園児家庭の生活実態、日本総合愛育研究所紀要第33集、p259-265、1996。
- 2) 齋藤幸子、他：親と子の生活に関する調査(第2報) 保育園児家庭と幼稚園児家庭との比較、日本子ども家庭総合研究所紀要第34集、p189-196、1997。
- 3) 高橋種昭、他：小児の養育における父親の役割について、平成元年厚生省心身障害研究「地域・家庭環境の小児に対する影響に関する研究」報告書、1990。
- 4) 高橋種昭、他：小児の養育における父親の役割について、平成2年厚生省心身障害研究「地域・家庭環境の小児に対する影響に関する研究」報告書、1991
- 5) 石井京子、他：父親の親としての意識の発達に及ぼす養育行動の分析、小児保健研究、vol57-6、p767~772、1998
- 6) 高野 陽、他：社会環境が結婚・出産・育児に及ぼす影響に関する研究、厚生省心身障害研究「少子化に関する専門的研究」平成9年度報告書、p139-208、1998